
日本人と中国人の身体接触行動の 比較および背景要因の検討

谷口俊治 黄 慧瑤

Touching behavior is one of the indispensable means of nonverbal communication for humans. The purpose of this study was to confirm the actual state of cultural differences in touching behavior between Japanese and Chinese students, and to clarify the relationship with psychological characteristics related to touching behavior. We conducted a questionnaire survey of Japanese and Chinese students regarding touching behavior with mothers, fathers, same-sex friends, and heterosexual friends, and obtained data for a total of 527 students. Overall, there were more touching behaviors with same-sex friends and mothers than with fathers and heterosexual friends, and Japanese had less frequent touching behaviors than Chinese had in all touching subjects. In addition, females had more touching behaviors than males had with mothers and same-sex friends. The influence of sexual factors and cultural factors related to family relationships was speculated as the cause of these results. Regarding psychological characteristics, Japanese was more mutually cooperative than Chinese, and Chinese was more mutually independent than Japanese. In addition, Japanese had less feeling of understanding-empathy possibility with regard to loneliness than Chinese, and Chinese had higher autonomous assistance from parents than Japanese. The involvement of feeling of understanding-empathy possibility and mutual independence-cooperation were shown as factors that determine touching behavior. Consequently, it was speculated that the touching behavior was defined, being accompanied by feeling of understanding-empathy possibility, by the cultural and sexual factors related to family relationships and the independence of the ego.

Key words: touching behavior, cultural differences, mutual independent and dependent construal of the self, loneliness, autonomy

対人コミュニケーションは、人がその心性 (mentality) を相互に交換する過程であり、大別すると言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションがある (田中・田中, 1996; 林・谷口・米田, 2014)。言語コミュニケーションは、記号的要素とそれ以外の音声の要素から構成される。前者は音声パターンを成し、文字でも表現することができる。後者は、音声の強弱、高低、テンポ (速度)、イントネーション (抑揚) などの要素である。非言語コミュニケーションは、言語以外の

身体から発せられる情報 (変化) の交換過程であり、その役割の重要性が指摘されている (Mehrabian, 1968; Birdwhistell, 1970; Patterson, 1983 など)。顔面表出、姿勢、歩行、動作 (しぐさ)、行為は主に視覚情報であるが、匂いなどの化学物質あるいは物理的な身体接触に関わる情報もある。その他、化粧、髪型、服装、帽子・靴、アクセサリ (装身具) など、その人に関わる事物を通して多様な情報が交換されている (林・谷口・米田, 2014; 谷口・石井, 2015)。

本論は、他者との身体接触によるコミュニケーション過程を研究対象としている。上でも述べたように、非言語的に情報を交換する手段は数多くあるが、中でも身体接触は根源的な感覚に基づくものであり (Argyle, 1988)、より原始的で基本的なコミュニケーション手段の一つだと考えられる (Knapp, 1972)。系統発生的に視覚や聴覚などが発達するまでは、個体同士のコミュニケーションは化学物質あるいは物理的接触によって行われていたと考えられる。

本元・山本・菅村 (2014) は、触覚と温度感覚の皮膚感覚研究を身体化認知の視点から概観した。その中で、皮膚感覚が社会的判断に影響を及ぼすことを示した。またそのメカニズムとして、顔や手指などの無毛部位の機能的特徴、オキシトシン神経系を介した他者との情緒的つながりや信頼感あるいは共感性の向上をもたらす機能、および個体発生の初期における身体接触の重要な役割に言及している。Harlow (1958) は、子ザルにとっては、授乳よりも感触の良い布で覆われた代理母の誘因価が高いことを示した。鯨岡 (1997) は、言語の発達以前に母子間で行われる原初的コミュニケーションを明らかにした。山口 (2004) は、乳児にとって母親との皮膚接触が重要であり、愛情は肌に触れることによって芽生えてくるとしている。

成人においても、対人場面での握手、抱擁、キスなどはさまざまな国、地域、民族で一般的な身体接触行為である。鈴木 (2014) が述べるように、身体接触は人間相互のコミュニケーションにおける力強い情報伝達手段である。永澤・岡部・茂木・菊水 (2013) は、母子の養育関係や雌雄のパートナー間の相互コミュニケーションにおけるオキシトシン神経系の役割をまとめている。例えば、母子間の吸乳、あるいは舐め行動や毛づくろいなどの触覚を介した接触行動がオキシトシン神経系の活性化をもたらすことを紹介している。

身体接触における文化差

呉 (2009) は、身体接触行動に関する心理学的研究を展望した。その中で、Hall (1966) による接触文化 (アラブ系・ラテン系文化) と非接触文化 (北アメリカ・北ヨーロッパ文化) の分類、Montagu (1977) によるアメリカ人と日本人の幼児に対する養育行動の差異など、仁平らによる日本とボリビアの接触行動の比較 (ボリビアの方が身体接触に好意的) (仁平・残間・平田・Foster, 1997; 残間・仁平・平田・Foster, 1997; 平田・仁平・残間・Foster, 1997)、Jourard (1966) によるアメリカ人を対象とした部位別身体接触の量的測定、鈴木・春木 (1989) による日本人を対象とした部位別身体接触の量的測定 (日本はアメリカよりも対人接触頻度が少ない)、Barnlund (1975) による Jourard (1966) と同様の方法を用いた身体接触パターンの日米比較 (日本の身体接触頻度はアメリカの半分)、林 (1984) による Barnlund (1975) と同じ方法を用いた身体接触行動の日韓比較 (日韓で同じ身体接触量) が言及された。その後、呉 (2006) が行った Jourard (1966) と同様の方法を用いた中日比較の結果 (国の違いよりも場面、接触相手、性別の効果が大きい) を報告している。

曹 (2016) および曹・釘原 (2017) は、日本と韓国の大学生について、身体接触の対象者別および身体の部位別に接触の頻度を測定した。その結果、父親、母親および同性親友で日本より韓国の接触頻度が多かった。両国とも、もっとも身体接触頻度が少ないのは父親でもっとも多かったのは異性親友であった。また、日本より韓国の方が、また男子より女子の方が、身体接触頻度が多かった。

以上のように身体接触の頻度には文化的差異が見られるが、本研究は日本と中国の差異を確認し、その規定要因を探ることを目的としている。王 (2008) によれば、日本人は自身の意見や意思を明確に他者に伝えようとせず、暗黙裡のコミュニ

ケーションを重視する。これに対して、アメリカ人は明確な意思表示が多く、言葉による表現が少ない日本人と対照的である (Barnlund, 1975)。同様の関係性は日本人と中国人の間についても見られる。中国では明確にコミュニケーションをすることが必要だと考えられるが、日本人は自身のメンタリティを他者に明確に表現することを好まないために、言語表現が少ないばかりでなく、身体接触による表現も抑制していると考えられる。身体の接触は言葉より強力なコミュニケーションの手段であり、そのため、体と体の触れ合いを最小限にしているのだと考えられる。曹・杉森・高 (2017) は、日本人と中国人のコミュニケーションにおける感情表出とその認知の特徴をマルチモーダルに分析し、日本人は中国人より声からの感情情報に依存しやすいことを示した。この場合は、日本人にとっては視覚情報よりも音声情報が感情認知において重要なことを意味する。この結果は、さまざまな情報経路の一つである身体接触情報についても、特定情報経路としての選択傾向に文化差がありうることを示唆している。

このようなコミュニケーション様態の違いは、何らかの心理特性に起因すると考えられる。日本人は、他者のメンタリティの感知に優れ、他者の感情、思考、希望などに沿った言動をすると考えられる。これが、日本では明確なコミュニケーションがなくても対人関係にさほど問題がない一つの理由と考えられる。このような対人認知スタイルが広まった背景には Nitobe (1905) の指摘にあるように、伝統的な慎みを美德とする道徳文化があると考えられる。

文化差に対応する心的特性

以上のような文化的要因は、何らかの心的特性と深く関わっていると考えられる。他者に対する明確なコミュニケーションは、個人主義の特徴でもある。他者と対峙する明確でより強い自我が身体接触の規定要因になっていると考えることがで

きる。中国人は相互に独立的であり、そのためコミュニケーションにおいて、言葉は明確で身体接触も多く用いられていると考えられる。一方、日本人は相互に協調的であり、周りの人をよく観察し、お互いの心情は言わなくても通じることが少なくない。そのため、身体接触によるコミュニケーションも中国と比べて、少ないと考えられる。

活発なコミュニケーションは相互のメンタリティの交流につながり、孤独感を緩和する効果があると考えられる。落合 (1989) は、孤独感を「人と親密な関係をもとうとする志向性をもちながら、それが実現しないときに、人間同士の理解・共感は難しいと感じ、自分はひとりだと感じる」と定義している。身体接触を行うことにより人との理解や共感が促進され、孤独感を緩和することができると考えられる。

自我の育成には親からの自律援助が作用していると考えられる。独立性に関わる要因として、自律に関する教育上の態度の違いが考えられる。親が子どもに自律を促す教育を行うことで、子どもはより自律的な人間に成長すると考えられる。

本研究の目的

本研究では、はじめに家族 (父親、母親) および友人 (同性、異性) との身体接触に関する日本と中国の実態を明らかにし、次に、身体接触の文化差をもたらしている心理特性との関係を検討する。仮説は以下の通りである。①身体接触は日本より中国の方が多い。②日本は他者との協調性が高く、中国は自我の独立性が高い。③自己と他者の心理的自我境界が明確であるほど、身体接触によるコミュニケーションが多い。④身体接触が多いほど孤独感が少ない。

方 法

調査票

フェイス項目と身体接触に関する項目

調査票のフェイス項目は調査協力者の性別、年齢、友人と親友の各人数、恋人の有無について問うものである。身体接触については、日本および中国の公共空間で一般的に観察される行為を選択した。接触の対象を、母親、父親、同性・異性の友人に分けて測定を行った。接触の程度を、「しない」(1点)、「あまりしない」(2点)、「どちらかというとしめない」(3点)、「どちらかいうとする」(4点)、「時々する」(5点)、「する」(6点)の6段階で測定した。接触に関する質問は全部で9項目あり、その内容については、結果の基礎統計で示す。

心理特性尺度

心理特性尺度は、相互独立・相互協調的自己観尺度(木内, 1995; 木内, 2001)、孤独感の類型判別尺度(LSO)(落合, 1983; 落合, 2001)、および親からの自律性援助測定尺度(櫻井, 2011)を用いた。

相互独立・相互協調的自己観尺度は「相互独立的自己観」と「相互協調的自己観」の二つの側面から自己観の個人差を測定するものである。相互独立性は、自己が他者から独立していることを意味する。相互独立性が強い文化で重視されることは、自律的であることや独立の特性を見つけ表現することである。自己の定義において他者は重要な意味を持たず、自己は他者なしでも完全な存在と理解されている。一方、相互協調性は、人間相互の基本的なつながりを重視し、関係のある他者と協調関係を維持することが大切にされている。特定の文脈における他者との関係が自己を定義し、自己は適切な社会的関係の中に位置付けられた時に意味を持ち、完全になると理解されてい

る(木内, 1995)。この尺度は、AとBの二つの回答選択肢が用意された16対の項目より形成されている。ここでAが相互協調的自己観、Bが相互独立的自己観を表す場合(9項目)とその逆になる場合(7項目)がある。回答選択肢は、「Aにぴったりとあてはまる」(1点)、「どちらかといえばA」(2点)、「どちらかといえばB」(3点)、「Bにぴったりとあてはまる」(4点)とした。括弧内の得点は、Aが相互協調的自己観、Bが相互独立的自己観の場合である。

LSOでは、青年期の孤独感、人間同士の理解・共感の可能性についての感じ(考え)方の次元(LSO-U)と、自己(人間)の個別性の自覚についての次元(LSO-E)、の2次元で構成され、これらの次元によって4つの孤独感の類型が決定される。この尺度は16項目からなり、本来の回答選択肢は5件法であるが、本研究では「あてはまらない」(1点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「どちらかというにあてはまらない」(3点)、「どちらかというにあてはまる」(4点)、「ややあてはまる」(5点)、「あてはまる」(6点)の6件法にした。

親からの自律性援助尺度における自律性援助とは、子どもの行動をコントロールするために罰などのプレッシャーを与えるのではなく、子ども自身が何かをはじめたり選択したりすることを励ます態度や行動のことを指す。回答選択肢は、「全くあてはまらない」(1点)、「ほとんどあてはまらない」(2点)、「あまりあてはまらない」(3点)、「少しあてはまる」(4点)、「だいたいあてはまる」(5点)、「よくあてはまる」(6点)とした。

日本語版および中国語版調査票

調査票は最初に日本語版を作成した。中国語版は、実用日本語検定特A級(さまざまな分野、場面において、専門的な話題も理解し対応できる高度なコミュニケーション能力がある。)、および日本語能力試験N1と日本語教師資格を持つ第2著者が作成した。

調査協力者

調査協力者は、愛知県内の文系女性大学1校117名、理系の共学大学1校68名、中国は山東省青島の語学・ビジネス・教育系の短期大学1校371名の学生で、計556名である。全体で550名(98.9%)から調査票が回収された。大半が未回答の調査票を除き、最終的に分析対象としたデータ数は527部である。その内、日本は173名(男性51名、女性122名)、中国は354名(男性81名、女性273名)である。中国と日本のどちらも女性のデータ数は男性を上回っている。全体的に中国のデータは日本のほぼ倍あった。データ収集の制約もあって、日本と中国のデータ数が大きく異なるが、分析には支障ないと考える。

年齢については、中国では一般的に数え歳が用いられるため、歳だけではなく生まれた月も回答を求めた。平均値から見ると、日本の男性の平均年齢(21.2歳)は女性の平均年齢(19.2歳)よりも高いが、中国には年齢に関する性差があまり見られない。各サンプルの平均年齢をTable 1に示す。なお、欠損値がある場合は前記の分析対象データ数と一致しない。

Table 1 各調査対象の国・年齢別平均年齢

国別	性別	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>
日本	男性	50	21.2	1.73	19.5	27.8
	女性	122	19.2	0.88	18.0	22.2
	計	172	19.7	1.49	18.0	27.8
中国	男性	74	19.9	0.91	18.2	22.3
	女性	256	19.6	0.79	17.3	22.7
	計	330	19.7	0.83	17.3	22.7
全体	男性	124	20.4	1.44	18.2	27.8
	女性	378	19.4	0.84	17.3	22.7
	計	502	19.7	1.10	17.3	27.8

手続き

中国山東省での調査を依頼した短期大学には、日本で印刷した中国版の調査票を事前に送付した。山東省での調査は2018年6月と7月に行った。

日本での調査は7月に行った。調査は各校の講義時間に紙面で実施した。調査に要した時間は20分程度であった。

分析の手順

データ処理はIBM SPSS Statistics (バージョン26)を用いて行った。

はじめに、質問の大半が未回答であったものは分析の対象から除外した。一部の質問項目が未回答であったものについては、未回答の質問項目は欠損値として扱い、分析対象に含めた。友人数のところに「10以上」と記入された回答は15人、「何人かいる」と記入された回答は5人、「<10」と記入された回答は10人とした。

身体接触に関するすべての項目については、接触の対象(母親、父親、同性・異性の友人)ごとに分析を行うと共に、全項目を対象とする因子分析により接触対象ごとの因子得点を算出した。

心理特性尺度については、通常各項目得点の加算によって尺度得点を求めるが、本研究では、一部の測定項目が欠落していたこと、日本と中国で質問項目の意味が異なる可能性があることから、各尺度項目の因子分析で得られた因子得点を尺度得点として用いることにした。

相互独立・相互協調的自己観尺度では、項目16が中国版の調査票から欠落していたため、これを除外して因子分析を行い(最尤法、バリマックス回転)1因子の得点を求めた。この因子得点は、素点の加算による尺度得点と同じ方向性を持つ。

LSOの項目の因子分析(最尤法、バリマックス回転)の結果、LSO-U因子の負荷量が高い項目は、2、3、4、5、12、15であった。また、LSO-E因子の負荷量が高い項目は、6、9、11、16であった。この因子得点は、素点の加算による尺度得点と同じ方向性を持つ。

孤独感の類型については、LSO-UとLSO-Eのそれぞれの因子得点の中央値を基準として得点の高低2群に分けた。LSO-E低群・LSO-U高群をA

型、LSO-E低群・LSO-U低群をB型、LSO-E高群・LSO-U低群をC型、LSO-E高群・LSO-U高群をD型とした。

親からの自律性援助測定尺度については、項目7が中国版の調査票から欠落していたため、これを除外して因子分析を行い（最尤法、バリマックス回転）1因子の得点を求めた。この因子得点は、素点の加算による尺度得点とは方向性が逆になっている。

結果と考察

友人・親友の数と恋人の有無

友人の数は回答の散布度が大きいため、0～9人(18.3%)、10～16人(19.4%)、17～30人(20.4%)および31人以上(16.8%)の4群に分けた。友人の人数に性差はなかったが、男性($\chi^2=8.65$, $df=3$, $p<.05$)、女性($\chi^2=29.1$, $df=3$, $p<.001$)、全体($\chi^2=35.2$, $df=3$, $p<.001$)でそれぞれ日本より中国の方が友人の人数が少なかった。親友の数も同様に散布度が大きいため、0～2人(28.5%)、3～4人(23.0%)、5人以上(35.1%)の3群に分けた。日本と中国の間に差はなかったが、日本($\chi^2=5.60$, $df=2$, $p<.1$)、中国($\chi^2=4.85$, $df=2$, $p<.1$)および全体($\chi^2=10.2$, $df=2$, $p<.01$)でそれぞれ女性の方が男性より親友の人数が少なかった。友人がどのような関係を指すのかについては、日本と中国で異なる。中国には「好朋友」、「一般的朋友」という言い方があるが、この二つの差異は日本の場合と比べると曖昧である。日本においては「親友」と「友達」の区別がはっきりしており、相手によって取る行動も変わってくる。しかし、中国においては「好朋友」と「一般的朋友」の間で接触によるコミュニケーションは大きく変わらないと考えられる。今現在恋人と言える人の有無については男女間の差はなかったが、女性については中国(37.1%)の

方が日本(20.8%)より恋人のいる率が高かった($\chi^2=10.1$, $df=1$, $p<.01$)。

対象別の身体接触頻度

Table 2は母親、父親、同性の友人、および異性の友人との身体接触に関する日本と中国を合わせた記述統計と因子分析の結果である。同性の友人に対する接触が各部位で多く、次いで母親、父親、そして異性の友人となっている。各接触対象の全項目の平均値を比較すると、同性友人と母親の平均値の差(0.153)および父親と異性友人の平均値の差(0.564)に比べて、同性友人と父親の平均値の差(1.30)あるいは同性友人と異性友人の平均値の差(1.86)、母親と父親の平均値の差(1.15)あるいは母親と異性友人の平均値の差(1.71)が大きい。各接触対象間の差異はすべて有意であった(母親と同性友人の平均値の差: $t=2.46$, $p<.05$ 、その他の対象間の平均値の差: $t=9.16\sim 26.67$, $p<.001$)。すべての接触対象と部位に関する項目について因子分析(最尤法、バリマックス回転)を行ったところ、各接触対象の因子が抽出された。

身体接触に関する国別および性別比較

国別・性別に見た母親との身体接触頻度の平均値をFigure 1に示す。中国は男女とも日本より接触が多いことが明らかである。すべての行動で、中国の女性は身体接触がもっとも多く、次に中国の男性が多い。その次が日本の女性である。日本の男性はすべての行動において接触がもっとも少ない。先に算出した母親接触因子得点の分散分析の結果、国別要因($F(1,506)=249.1$, $p<.001$, $\eta^2=.330$)と性別要因($F(1,506)=56.6$, $p<.001$, $\eta^2=.101$)が有意であった。国別要因と性別要因の交互作用は有意でなかった。

Table 2 各接触対象別に見た身体接触行動の頻度評価の記述統計と因子分析結果

接触対象	身体接触行動	n	M	SD	因子			
					1	2	3	4
母親	手をつなぐ(繋がれる)	530	3.55	2.08	.259	.280	.081	.786
	抱きつく(抱きつかれる)	529	3.33	2.02	.214	.328	.080	.727
	頭を撫でる(撫でられる)	528	3.06	1.98	.222	.350	.118	.601
	頬(ほお)にキスする(キスされる)	530	2.32	1.82	.182	.439	.143	.473
	頬(ほお)を触る(触られる)	530	3.01	1.97	.291	.348	.146	.592
	腕と腕を組む(組まれる)	529	3.95	2.12	.371	.252	.048	.747
	肩を揉む(揉まれる)	528	4.00	1.93	.310	.200	.078	.693
	髪を触る(触られる)	530	3.95	1.98	.402	.252	.086	.655
	肩を組む(組まれる)	530	3.48	2.12	.280	.350	.142	.672
	全項目	525	3.41	1.64				
父親	手をつなぐ(繋がれる)	527	2.12	1.69	.164	.799	.082	.217
	抱きつく(抱きつかれる)	526	2.14	1.67	.073	.768	.131	.229
	頭を撫でる(撫でられる)	527	2.31	1.78	.167	.748	.091	.238
	頬(ほお)にキスする(キスされる)	527	1.60	1.24	.027	.682	.197	.115
	頬(ほお)を触る(触られる)	526	1.88	1.51	.131	.732	.200	.165
	腕と腕を組む(組まれる)	527	2.45	1.91	.224	.672	.159	.257
	肩を揉む(揉まれる)	527	2.97	2.05	.182	.559	.125	.382
	髪を触る(触られる)	527	2.44	1.88	.241	.675	.096	.306
	肩を組む(組まれる)	527	2.35	1.85	.138	.683	.158	.242
	全項目	525	2.25	1.39				
同性友人	手をつなぐ(繋がれる)	529	3.79	2.08	.791	.139	.042	.288
	抱きつく(抱きつかれる)	528	3.95	1.94	.785	.104	.115	.219
	頭を撫でる(撫でられる)	528	3.57	2.04	.765	.150	.166	.212
	頬(ほお)にキスする(キスされる)	529	2.11	1.71	.480	.298	.254	.188
	頬(ほお)を触る(触られる)	529	3.03	1.96	.671	.177	.194	.143
	腕と腕を組む(組まれる)	529	4.11	2.06	.821	.085	.036	.258
	肩を揉む(揉まれる)	528	3.44	2.01	.635	.188	.153	.248
	髪を触る(触られる)	526	3.93	1.97	.792	.103	.085	.201
	肩を組む(組まれる)	526	3.93	1.96	.707	.140	.123	.185
	全項目	523	3.55	1.59				
異性友人	手をつなぐ(繋がれる)	527	1.54	1.21	.063	.079	.748	.045
	抱きつく(抱きつかれる)	527	1.63	1.27	.092	.130	.797	.048
	頭を撫でる(撫でられる)	527	2.13	1.69	.211	.140	.688	.162
	頬(ほお)にキスする(キスされる)	526	1.28	0.94	.004	.142	.667	-.016
	頬(ほお)を触る(触られる)	527	1.55	1.25	.092	.104	.729	.040
	腕と腕を組む(組まれる)	527	1.58	1.32	.075	.091	.747	.076
	肩を揉む(揉まれる)	527	1.76	1.49	.119	.145	.701	.132
	髪を触る(触られる)	527	2.16	1.68	.241	.105	.683	.164
	肩を組む(組まれる)	527	1.70	1.41	.081	.113	.733	.043
	全項目	526	1.71	1.06				
全体	全項目	512	2.72	1.11				

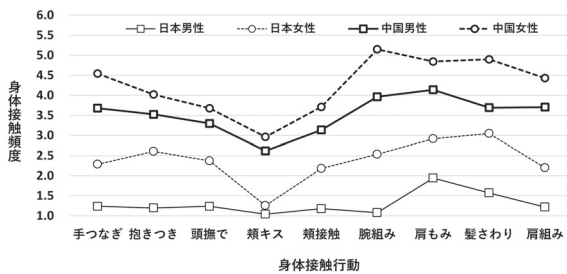


Figure 1 国別・性別に見た母親との身体接触頻度の平均値

Figure 2は国別・性別に見た父親との身体接触頻度の平均値である。全体にどの行動においても接触頻度は低いが、中国は男女共に日本より多い。先に算出した父親接触因子得点の分散分析の結果、国別要因 ($F(1,506) = 115.0, p < .001, \eta^2 = .185$) のみが有意であった。性別要因および国別要因と性別要因の交互作用は有意でなかった。

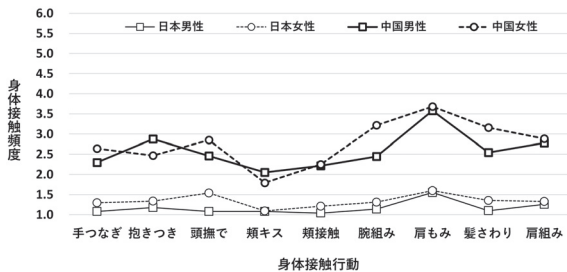


Figure 2 国別・性別に見た父親との身体接触頻度の平均値

Figure 3は国別・性別に見た同性友人との身体接触頻度の平均値である。男女それぞれで日本より中国の方が、すべての行動で接触が多い。また、日本と中国それぞれの大半の行動で女性の方が男性よりも接触が多い。日本の女性と中国の男性は接触頻度が類似している。先に算出した同性友人接触因子得点の分散分析の結果、国別要因 ($F(1,506) = 105.9, p < .001, \eta^2 = .173$) と性別要因 ($F(1,506) = 191.8, p < .001, \eta^2 = .275$) が有意であった。国別要因と性別要因の交互作用は有意でな

かった。

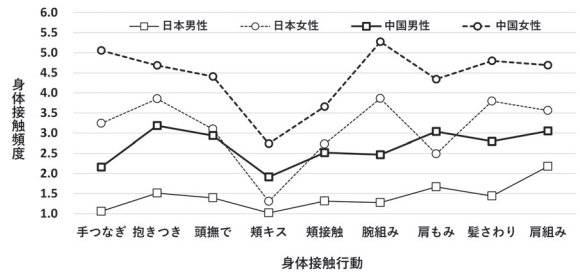


Figure 3 国別・性別に見た同性友人との身体接触頻度の平均値

Figure 4は国別・性別に見た異性友人との身体接触頻度の平均値である。大半の行動において日本より中国の接触頻度が多い。先に算出した異性友人接触因子得点の分散分析の結果、国別要因 ($F(1,506) = 35.7, p < .001, \eta^2 = .066$) のみが有意であった。性別要因および国別要因と性別要因の交互作用は有意でなかった。

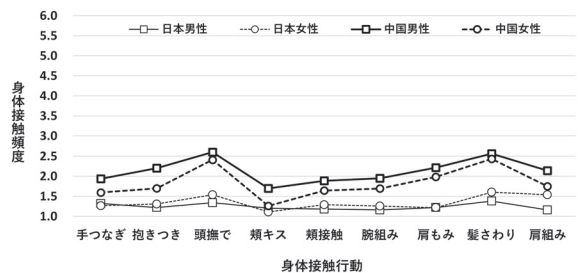


Figure 4 国別・性別に見た異性友人との身体接触頻度の平均値

心理特性尺度

相互独立・相互協調的自己観の因子得点は、日本よりも中国が高かった ($F(1,454) = 24.0, p < .001, \eta^2 = .050$)。性別要因と国別・性別要因の交互作用は有意でなかった。日本は相互協調的に周りの関係を重視し、他者との関係が自己を定義する傾向が強い。一方、中国では相互独立性が強く、自己は他者から独立したものと捉えられて

いると考えられる。

LSO-Uの因子得点は、日本よりも中国が高く ($F(1,511) = 25.5, p < .001, \eta^2 = .048$)、男性よりも女性が高かった ($F(1,511) = 4.44, p < .05, \eta^2 = .009$)。性別要因と国別・性別要因の交互作用は有意でなかった。LSO-Uの因子得点が低いほど、人間同士は理解・共感できるとは思っていないが孤独感が強い。一方、得点が高いほど、人間同士は理解・共感できると思っており孤独感が弱い。

LSO-E因子得点は、日本よりも中国が高かった ($F(1,511) = 10.9, p < .01, \eta^2 = .021$)。性別要因と国別・性別要因の交互作用は有意でなかった。日本より中国の方が個別性を自覚していることを意味する。これらの結果から、日本は中国と比べて、孤独感が強い傾向があると言える。

孤独感の類型については、男性の場合、日本はB型とC型が多く、中国はA型とD型が多い (Figure 5)。これは、日本は中国より人間同士が理解・共感できると思っている人が少ないことを意味する。女性の場合は、日本はB型が多く、中国はD型が多い (Figure 6)。これは、日本は中国より人間同士が理解・共感できるとは思っていない、また人間の個別性にも気づいていない人が多いことを意味する。日本と中国のいずれにおいても性差はなかったが、全体では男性にC型が多く (男性33.9%、女性20.9%)、女性にD型が多かった (男性20.5%、女性27.8%) ($\chi^2 = 9.38, df = 3, p < .05$)。

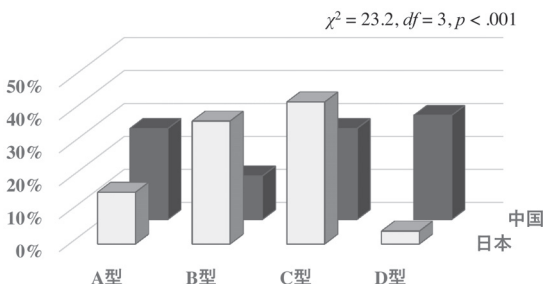


Figure 5 男性における日本と中国の孤独感の類型頻度

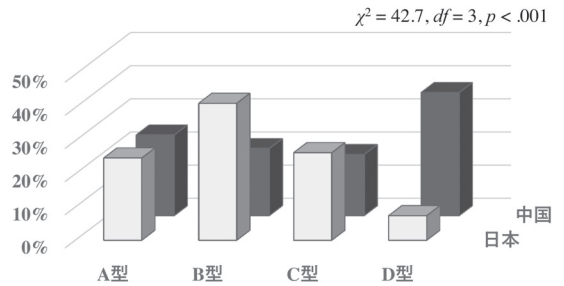


Figure 6 女性における日本と中国の孤独感の類型頻度

親からの自律性援助測定尺度の因子得点は、日本よりも中国が低く ($F(1,507) = 7.46, p < .01, \eta^2 = .015$)、男性よりも女性が高い傾向があった ($F(1,507) = 2.73, p < .1, \eta^2 = .005$)。性別要因と国別・性別要因の交互作用は有意な傾向があった ($F(1,507) = 3.48, p < .1, \eta^2 = .007$)。これらは、日本より中国の方が親からの自律援助が高く、子ども自身が何かを始めたり選択したりすることを励ます態度や行動をしていることを意味する。特に中国では男性より女性の方が顕著である。

身体接触と心理特性尺度の相関

Table 3は各接触対象の身体接触頻度因子得点と、各心理特性尺度因子得点との相関係数である。相互独立・相互協調的自己観尺度は、母親、父親、異性友人および同性友人との間に弱い相関がある。これは、相互独立している人ほど、身体接触によるコミュニケーションは頻繁になることを意味する。自己と他者が独立している文化では、より多くの身体接触によるコミュニケーションが用いられていると考えられる。

LSOの理解・共感尺度は、母親および同性友人との間に弱い相関がある。母親と同性友人においては、身体接触が多いほど孤独感が低いことを意味する。一方、自己個別性尺度では、いずれの対象との間にも有意な相関は見られなかった。

親からの自律性援助測定尺度は、母親、父親お

Table 3 各接触対象の身体接触頻度因子得点と心理特性尺度因子得点の相関係数

心理特性尺度	母親	父親	同性友人	異性友人
相互独立・相互協調自己観	.209***	.190***	.161***	.170***
LSO-U	.247***	.198***	.260***	.105*
LSO-E	.079	.052	.005	.038
自律性援助	-.217***	-.157***	-.138**	.013

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

および同性友人との間に有意な相関がある。いずれも、親が子どもに自律援助を行っているほど接触が多くなることを意味している。子どもが自律性を高める援助を受けているために、自己の個性や価値観が尊重され、自分と他者が違う人間であること認識し、より多くの接触によって、お互いの関係を深めたり、確かめたりしていると考えられる。

接触行動に対する心理特性の影響度

Table 4に各接触対象の身体接触頻度因子得点を従属変数とし、心理特性尺度因子得点を説明変数とした重回帰分析の結果を示す。Figure 7に母親接触頻度因子得点の予測値と実測値の散布図を示す。また、Figure 8に同性友人接触頻度因子得点の予測値と実測値の散布図を示す。これらから、身体接触頻度を規定する心理特性として、LSO-Uと相互独立・相互協調的自己観の影響力が相対的

Table 4 各接触対象の身体接触頻度因子得点を目的変数とし、心理特性尺度因子得点を説明変数とした重回帰分析結果（標準偏回帰係数、分散分析、決定係数）

接触対象	相互独立・相互協調自己観	LSO-U	LSO-E	自律性援助	F	R ²
母親	.145**	.217***	.111	-.175	16.2***	.130
父親	.144**	.172***	.088 [†]	-.131	10.6***	.090
同性友人	.111*	.232***	.044	-.084	10.7***	.090
異性友人	.175***	.099*	.020	.028	5.2***	.046

[†] $p < .1$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

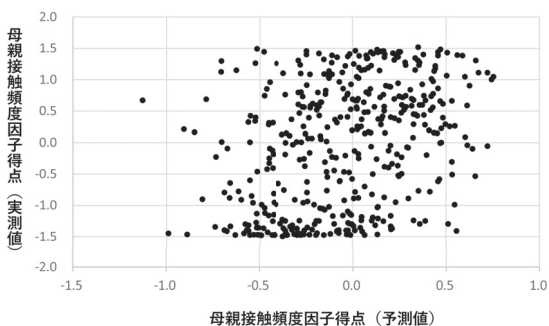


Figure 7 母親接触頻度因子得点の予測値と実測値の散布図

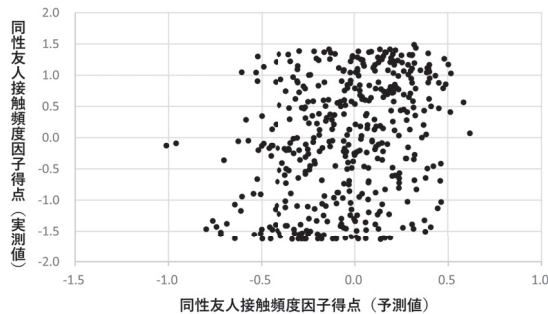
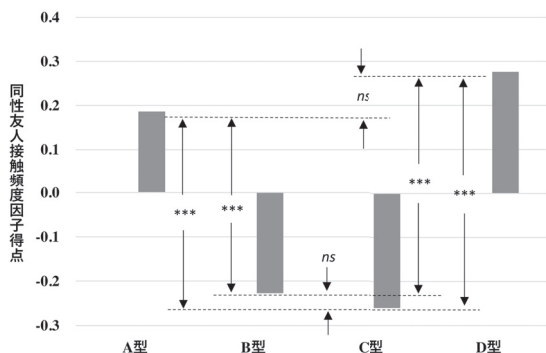


Figure 8 同性友人接触頻度因子得点の予測値と実測値の散布図

に強いと考えられる。

Figure 9に孤独感の各類型の同性友人接触頻度因子得点を示す。A、D型の得点がB、C型よりも高いことは、理解・共感可能性が高い人に同性友人との身体接触が多いことを意味している。



*** $p < .001$

Figure 9 各孤独感類型の同性友人接触頻度因子得点

討 論

身体接触の規定因と日中比較

身体接触行動は、腕組みや髪に触るなどの動作の種類に規定されるのではなく、主に接触する相手によって大きく影響されると考えられる。つまり、同じ抱きつく動作であっても、母や友達など相手によって意味が異なる。このことは、接触項目の因子分析の結果、接触相手の要因のみが因子として抽出されたことで確認される。

同性友人と母親に対する接触が父親と異性友人に対する接触よりも多かったが、この内の同性と異性の友人に関する差は、性要因が身体接触行動に対して抑制的に関与していることを示唆する。鈴木 (2014) は、女子が洗濯の際に父親の衣類との混合を嫌悪する傾向が高いことを示した過去の研究 (竹内・鈴木, 1996; 鈴木・竹内, 1997) を紹介している。羽成・河野・伊藤・角田 (2014)

は、女性は同性より異性への接触回避が強く、これは性戦略上の必要性に基づいている、女性にとって異性の肉親、つまり父親や兄弟は、血縁が近いからこそ性的な接触を避けなければいけない、そのため、父親や兄弟に対しても身体接触の回避が強くなっている、と述べている。一方、母親と父親に対する接触については、接触する側の性別との関係ではなく、対象の性別つまり母性と父性が規定因になっていると考えられる。呉 (2009) は、日本人の女子と中国人の女子は共に成長するにつれ、親との接触が減少傾向にあることを示した。しかし、中国は父親と母親との接触の差異があまりないことに対して、日本は明らかな差異があり、幼少期から高校時代以後、その差が徐々に大きくなっている。これについては、男子にも同じような傾向が見られる。父親に対する身体接触の回避が、日本に比べて中国ではそれほど見られない理由として、中国の文化に浸透している儒教思想が考えられる。儒教の始祖である孔子の「仁学」では「孝」が重視されている。また、親孝行に関する記載が学校の教科書にもあり、中国人の道徳観に影響していると考えられる。このことは、中国の結婚観や子弟の援助あるいは親の介護に関する考え方にも見られる。結婚は個人の結びつきよりも家族間の連携としての意味を重視する。子どもに対する就職までの手厚い金銭的援助、施設に依存しない老後の親の介護などである。これらのことから、中国では、自分の親を性的対象として認識する傾向が弱いと考えられる。

すべての接触対象で、日本は中国よりも接触頻度が低かった。これは、明らかに両国間に身体接触に関する文化差があることを意味している。性差は母親と同性友人にのみあり、父親と異性友人には見られなかったが、父親の場合は性要因の効果が上で述べたような理由で抑制されているためと考えられる。全体的に女性の方が男性よりも身体接触が多いのは、女性のコミュニケーションに対する動因が進化生物学的に高いことに起因する

と考えられる。

心理特性と身体接触行動

本研究では、以下のような心理特性と身体接触行動との関連が示された。相互独立・相互協調的自己観尺度については、日本は中国よりも相互独立性が低く、相互協調性が高かった。孤独感尺度のLSO-Uについては、日本よりも中国の方が理解・共感性が高く、また男性よりも女性の方が理解・共感性が高かった。孤独感尺度のLSO-Eについては、日本よりも中国の方が個別性の自覚が高かった。親からの自律性援助測定尺度については、日本よりも中国の方が親からの自律性援助が大きく、男性よりも女性の方が親からの自律性援助が大きい傾向があった。また相関係数に基づく分析の結果、LSO-Eを除く各心理特性は、親からの自律性援助因子と異性友人接触因子を除き、各接触対象に対する身体接触との関連が有意であった。重回帰分析では、接触対象により程度は異なるが、LSO-Uと相互独立・相互協調的自己観の接触頻度への関与が示唆された。

以上の結果から、これらの心理特性が対人関係における文化差を生じる背景要因の一部であり、日本と中国の身体接触行動の差異と関連していると考えられる。心理特性と身体接触行動の因果関係は本研究の結果からは判断できないが、相互独立性は自我に関する基本的特性であることから、身体接触行動の規定因となっていると推測できる。自己と他者の自我境界が明確な文化では、より多くの身体接触によるコミュニケーションが用いられていると考えられる。中国のように歴史的に文化や習慣、価値観が多様な社会では、他者に自分の意志を伝えるためには情報を強く明確に発信する必要がある。そのために、身体接触によるコミュニケーションという強力な手段が用いられていると考えられる。

一方、相互協調性が高いほど、身体接触によるコミュニケーションは不要と考えることができ

る。日本は単一民族であり、以心伝心の文化があり、協調性が高い。言葉にしなくても相手が理解してくれる場面は少なくない。そのような理由から、あえて身体接触という強力な手段を用いる必要が少ないと考えることができる。そうした状況で身体接触が生じた場合には、他者のメンタリティに関する過剰な情報が不快感を生じる可能性もある。

LSO-Uは全体に日本より中国の方が高かったが、男性の孤独感の類型でも、日本がB型とC型が多く、中国はA型とD型が多く、日本は中国より理解・共感の可能性についての感じ方が低いことを意味している。女性の孤独感の類型については、日本はB型が多く中国はD型が多かった。これは、日本の女性は理解・共感の可能性も個別性の自覚も共に低いが、中国はそれとは対照的に理解・共感の可能性も個別性の自覚も高いことを意味する。また、A型とD型で身体接触が多いことも示されていたことから、身体接触と理解・共感可能性の間に深い関係があることが推測される。両者の因果関係は判断できないが、孤独感の理解・共感可能性は身体接触行動に対して一方向的に作用するのではなく、身体接触行動と相乗的に作用すると考えられる。身体接触によってある程度孤独感を和らげることができるとも考えられるし、理解・共感可能性が高いがために接触頻度が高くなるとも考えられる。

親からの自律性援助測定尺度について、中国は日本より親からの自律性援助が高かった。接触との関係性について、相関係数では母親、父親および同性友人との身体接触に有意な関係が見られた。しかし、重回帰分析ではLSO-Uと相互独立性の要因に比べて効果が弱く、身体接触行動の規定因としてはわずかな効果にとどまると考えられる。

本研究のデータは愛知県と中国山東省青島の大学生から得られた。日本の人口は1億2千万人である。一方、中国の人口は14億人を超えている。

先にも述べたように、日本は単一民族であるのに対して中国は多様な民族から構成され、複数の言語が用いられている。このような背景を考えると、特定の地域の学生から得られたデータのみに基づいて両国の身体接触行動に関する特性を記述し、分析して差異を結論づけるのは困難と言わざるを得ない。特に中国については、母集団があまりに巨大で心理特性も多様である。そうした限界を前提とした上でも、本研究の結果は、少なくとも中国山東省青島と愛知県の学生の身体接触行動について、その差異と関連する心理特性の特徴を描出したと言える。

本研究は、相山女学園大学文化情報学部の倫理審査委員会の承認（2018年7月16日）を得て実施された。本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

- Argyle, M. (1975). *Bodily Communication*. Methuen.
- Barnlund, D.C. (1975). *Public and Private Self in Japan and the United States: Communicative Styles of Two Cultures*. Simul Press.
(バーンランド, D. C. 西山千 (訳) (1979). 日本人の表現構造—公的自己と私的自己・アメリカ人との比較 サイマル出版会)
- Birdwhistell, R. L. (1970). *Kinesics and Context: Essays on Body Motion Communication*. University of Pennsylvania Press.
- 曹蓮・杉森伸吉・高史明 (2017). 中国人と日本人の感情認知における表情と声の相互干渉性 心理学研究, **88**, 1-10.
(Cao, L., Sugimori, S., and Taka, F. (2017). The mutual interference of facial and vocal information in Chinese and Japanese people's perception of emotions. *The Japanese Journal of Psychology*, **88**, 1-10.)
- 曹美庚 (2016). 身体接触における文化の影響 阪南論集社会科学編, **51**, 263-274.
(Cho, M.)
- 曹美庚・釘原直樹 (2017). 親しい相手との身体接触に関する日韓比較研究 応用心理学研究, **43**, 45-53.
(Cho, M. & Kugihara, N. (2017). A Comparative study on touching behaviors with close persons between the Japanese and Koreans. *Japanese Journal of Applied Psychology*, **43**, 45-53.)
- 呉映妍 (2009). 接触行動の異文化比較：心理学的研究の展望 鶴山論叢, **9**, 21-37.
(Go, E. (2009). The intercultural study of touching: A prospects of the psychological study. *Journal of Cultural and Social Sciences*, **9**, 21-37.)
- Hall, E. T. (1966). *The Hidden Dimension*. Anchor Books.
(ホール, E. T. 日高敏隆・佐藤信行 (訳) (1970). かくれた次元 みすず書房)
- 羽成隆司・河野和明・伊藤君男・角田千夏 (2014). 青年期の女性の父親に対する回避傾向 相山女学園大学文化情報学部紀要, **14**, 93-100.
(Hanari, T., Kawano, K., Ito, K., and Tsunoda, C.)
- Harlow, H. (1958). The nature of love. *American Psychologist*, **13**, 673-685.
- 林文俊・谷口俊治・米田公則 (2014). メディアと人間—メディア情報学へのいざない ナカニシヤ出版
(Hayashi, F., Taniguchi, S., and Komeda, K.)
- 林建彦 (1984). 日本人と韓国人との表現構造比較研究—D.C.バーンランドの日・米比較を基礎として— 東海大学文学部紀要, **41**, 113-136.
(Hayashi, T. (1984). A comparative study of expressional structure between Japanese and Korean: On the basis of D. C. Barnlund's comparative study between Japanese and American. *The bulletin of the Faculty of Letters, Tokai University*, **41**, 113-136.)
- 平田忠・仁平義明・残間理恵・Foster, M. (1997). 身体接触到に反映された親子関係の文化的差異 (3) —日本とボリビアの親子間の身体接触の頻度の発達の变化— 東北心理学研究, **48**, 48.
(Hirata, T., Nihei, Y., Zanna, R., and Foster, M.)
- 本元小百合・山本佑実・菅村玄二 (2014). 皮膚感覚の身体化認知の展望とその課題 関西大学心理学研究, **5**, 29-38.
(Honmoto, S., Yamamoto, Y., Sugamura, G. (2014). A theoretical review of embodied cognition research involving skin sensations. *Kansai University Psychological Research*, **5**, 29-38.)
- Jourard, S. M. (1966). An exploratory study of body-accessibility. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, **5**, 221-231.
- 木内亜紀 (1995). 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **66**, 100-106.
(Kiuchi, A. (1995). Construction of a scale for independent and interdependent construal of the self and its reliability and validity. *The Japanese Journal of Psychology*, **66**, 100-106.)
- 木内亜紀 (2001). 相互独立・相互協調的自己観尺度 山本真理子 (編) 心理測定尺度集 I—人間の内面を探る (自己・個人内過程)—サイエンス社 pp.10-15.
(Kiuchi, A.)
- Knapp, M. L. & Hall, J. A. (2006). *Nonverbal Communication in Human Interaction*. 6th ed. Thomson Wadsworth.
(ナップ, M. L. 牧野成一・牧野泰子 (訳) (1979). 人間関係における非言語情報伝達 東海大学出版会)
- 鯨岡峻 (1997). 原初のコミュニケーションの諸相 ミネルヴァ書房
(Kujiraoka, T.)
- Mehrabian, M. A. (1968). Communication without words.

- Psychological Today*, 2, 52-55.
- Montagu, A. (1971). *Touching: The Human Significance of the Skin*. Columbia University Press.
(モンタギュー, A. 佐藤信行・佐藤方代 (訳) (1977). タッチング—親と子のふれあい)
- 永澤美保・岡部祥太・茂木一孝・菊水健史 (2013). オキシトシン神経系を中心とした母子間の絆形成システム動物心理学研究, 63, 47-63.
(Nagasawa, M., Okabe, S., Mogi, K. and Kikusui, T. (2013). The biological perspective on mother-infant bonding: the importance of oxytocin. *The Japanese Journal of Animal Psychology*, 63, 47-63.)
- 仁平義明・残間理恵・平田忠・Foster, M. (1997). 身体接触到に反映された親子関係の文化的差異 (1) —日本とボリビアの親子間の身体接触に対する反応の因子構造— 東北心理学研究, 48, 46.
(Nihei, Y., Zanma, R., Hirata, T., and Foster, M.)
- Nitobe, I. (1905). *Bushido: The soul of Japan*. G. P. Putman's Sons.
(新渡戸稲造 樋口謙一郎・国分舞 (訳) (2008). 武士道—BUSHIDO: The Soul of Japan— IBCパブリッシング)
- 落合良行 (1983). 孤独感の類型判別尺度 (LSO) の作成教育心理学研究, 31, 60-64.
(Ochiai, Y.)
- 落合良行 (1989). 青年期における孤独感の構造 風間書房 (Ochiai, Y.)
- 落合良行 (2001). 孤独感の類型判別尺度 山本真理子 (編) 心理測定尺度集 I—人間の内面を探る (自己・個人内過程) —サイエンス社 pp. 217-221.
(Ochiai, Y.)
- Patterson, M. L. (1983). *Nonverbal Behavior: A Functional Perspective*. Springer-Verlag.
(パターソン, M. L. 工藤力 (監訳) (1995). 非言語コミュニケーションの基礎理論 誠信書房)
- 櫻井茂男 (2011). 親からの自律性援助測定尺度 吉田富二雄・宮本聡介 (編) 心理測定尺度集 V—個人から社会へ (自己・対人関係・価値観) —サイエンス社 pp. 171-175.
(Sakurai, S.)
- 鈴木晶夫 (2014) 非言語行動を手がかりとした人間関係研究—身体接触を中心に— 心身健康科学, 10, 5-9.
(Suzuki, M.)
- 鈴木晶夫・春木豊 (1989). 対人接触に関する試験的研究 早稲田心理学年報, 21, 93-98.
(Suzuki, M. & Haruki, Y.)
- 鈴木晶夫・竹内美香 (1997). 洗濯時の衣類混合の許容にみる身体接触の親子関係 (2) 日本心理学会第61回大会発表論文集, 236.
(Suzuki, M. & Takeuchi, M.)
- 竹内美香・鈴木晶夫 (1996). 洗濯時の衣類混合の許容にみる身体接触の親子関係 日本心理学会第60回大会発表論文集, 308.
(Takeuchi, M. & Suzuki, M.)
- 田中春美・田中幸子 (1996). 社会言語学への招待—社会・文化・コミュニケーション— ミネルヴァ書房
- (Tanaka, H. & Tanaka, S. (1996). *An Invitation to Sociolinguistics: Society, Culture, Communication*. Minerva Publishing.)
- 谷口俊治・石井梨瑚 (2015). 身体メディアとしての美容・化粧行動に及ぼす理想の女性像と自意識, 他者意識の影響 相山女学園大学文化情報学部紀要, 15, 89-106.
(Taniguchi, S. & Ishii, R. (2015). Effects of ideal women image, self-consciousness and another person-consciousness on beauty and makeup behavior as bodily media: Preliminary study with female students. *Journal of the School of Culture-Information Studies*, 15, 89-106.)
- 王敏 (2008). 日本と中国—相互誤解の構造 中央公論新社 (WANG, M.)
- 山口創 (2004). 子供の「脳」は肌にある 光文社 (Yamaguchi, H.)
- 残間理恵・仁平義明・平田忠・Foster, M. (1997). 身体接触到に反映された親子関係の文化的差異 (2) —日本とボリビアの親子間の身体接触に対する反応の発達の变化— 東北心理学研究, 48, 47.
(Zanma, R., Nihei, Y., Hirata, T., and Foster, M.)

付 記

本論文は、第2著者が文化情報学部メディア情報学科平成30年度卒業研究として提出した「非言語コミュニケーションにおける文化差—日中の身体接触の比較および背景要因の検討—」を元にして、問題と目的を再構成し、改めて分析と考察を行ったものである。

本研究の質問紙調査に協力をいただいた栗超先生と小嶋理江先生に感謝の意を表する。

たにぐち・しゅんじ / 文化情報学部教授

E-mail : tanshn@sugiyama-u.ac.jp

こう・けいよう / 文化情報学部メディア情報学科平成30年度卒業生